

浄土

monthly
JODO

4

April 2004





昭和43年6月号



昭和43年7月号



昭和43年8月号



昭和43年9月号



昭和43年10月号



昭和43年11月号



昭和43年12月号



昭和44年1月号



昭和44年2月号



昭和44年3月号



昭和44年4月号



昭和44年5月号



昭和44年6月号



昭和44年7月号



昭和44年8月号



昭和44年9月号

蓮



写真

三浦功大

舞妃蓮 千葉県佐原水生植物園



大賀蓮 新潟県十日町市





滋賀県草津市 琵琶湖烏丸半島



白洋淀 中国河北省



重台蓮



明美紅蓮

浄土

2004/4月号 目次

カラーグラビア 蓮	写真=三浦功大	1
講演概録 江戸庶民とお寺（後編）	田中優子	6
蓮〈幻の蓮—青い蓮〉	三浦功大	14
表紙のことば	石川忠夫	23
会いたい人 安野光雅②	関 容子	24
響流十方	小村正孝	32
梵字⑦ 最終回	真野龍海	36
バリアフリー考 最終回	白木 力	38
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	40
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ「さっちゃんねッ」	かまちよろう	51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人
鑽仰会

公開講演会概録

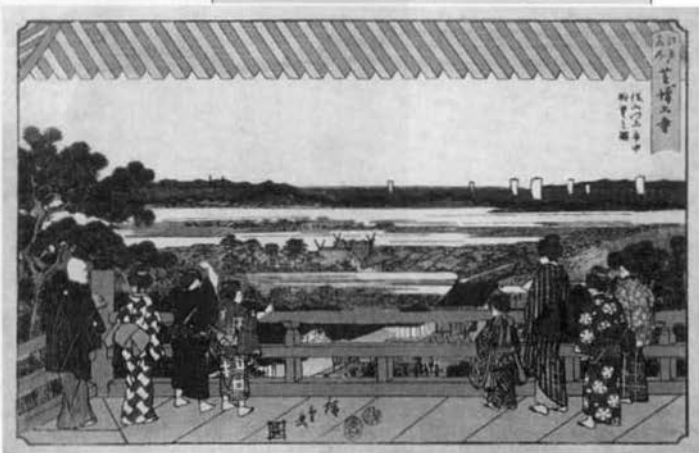
江戸 お寺

庶民と

後編

田中優子

法政大学社会学部教授



江戸時代の人たちは参詣がとても大好きで、よく参詣をしていましたが、その中に「富士講」というのがあります。富士講は八百八の講があつたと言われまして、富士講という講を組んで参詣をするんですね。体力のある方たちは本当の富士に行き富士登山をします。しかし、大抵の人は富士登山はできません。その代わりに富士塚をつくったんです。ですから、もともとは八百八の富士塚があつたはずで、現存しているのは四十二です。もちろん、江戸時代や幕末にはもっとあつたはずで、やはり広重はたくさん富士塚を描いています。

広重の富士塚でよく知られた富士塚の絵は目黒の富士塚ですね。これを見ますと、本当に道がちゃんとできていまして、登山をしているんですよ。富士塚ってかなり高いんです。ちょっと小高い丘程度の塚を人工的につくって、そこを登山するんですね。本当の富士山に登る代わりに、江戸の中で登山をする

わけです。

この「富士講」というのは一種の新興宗教です。「この富士山の中に、イザナギ（伊弉諾）とイザナミ（伊弉冉）がいた。この富士山は男と女という要素を抱え込んだ山で、そしてそこからすべての生命の世界が始まったのだ」というふうにするのが、富士講といわれる一種の新興宗教です。

これは仏教だと言えば仏教ですが、イザナギ・イザナミが出てくるわけですから、神道と言えば神道で、つまり何教ともちよつと言えない微妙なところがありますが、江戸時代の宗教というのはそうやっていろんなものを抱え込んでいる場合があるんですよ。だから一言で言えないような宗教が爆発的に流行するなんてことがあるんですよ。

でも、こういうような富士講の場合にも参詣するということはとても大事なことになると思います。参詣ということを考えてときに、富士講の場合には山が象徴になっています。

山がいろいろなものの源と考えるのには理由がありまして、日本だけじゃなくて、アジア全体の山の信仰の中に須弥山しゆみせんという信仰があります。

これはインドから始まっていて仏教ではおなじみの考え方なのですが、「宇宙は須弥山である」という考え方です。「宇宙全体が須弥山になっていて、そして宇宙の周りに風輪、水輪、金輪などの輪が積み重なり、そして我々の住んでいる大地がある。その大地の中に逆三角形をした場所があって、ここが人間が住むところである」と、これが須弥山の構造ですね。

金輪の際のことを「金輪際」といいます。ですから「金輪際何々しない」は「世界の果てまで行っても」という意味になります。こういう仏教の宇宙構造、宇宙像というものが江戸時代の人たちの頭の中に何となくあったようです。

ですから「須弥山」というのは山の形をして

いて、それが宇宙である」という感覚を持っていますので、これを富士山にも当てはめるんですね。そうすると「富士山というのは命の源だ」という考え方が出てきます。

そうやって富士山は、見て「きれいだな」ということだけではなくて「そこに何か根源的なものを感じる」という意味での象徴でもあるんですね。そして、それが江戸の象徴でもありました。風景というのは江戸時代の人たちにとっては単にきれいなものではなくて、大体何らかの宗教的な心情あるいは生命を感じる何かを伴っています。そういうことを想像させる場所ということですね。

名所というのもそうだと思うんですね。ですから、江戸が都市でありながら「多くの人たちが江戸の水や山、つまり、自然にとっても深い感情を持っていた」ということが、自然と感じられるようになるのです。

さて、もう一つ先ほど申し上げた広重の絵に出てくる芝神明なんですが、これが歌舞伎

でも有名なところですよ。歌舞伎の中に「め組の喧嘩」というのがありまして、江戸の華と呼ばれる喧嘩なんです、この中でも、とびの方たちの喧嘩というのは非常に有名でした。

現在でもとび職の方はいらっしやいます。とび職というのはもともと高いところで仕事をやる人たちのことです。でも、この方たちが火消しになるわけです。ご存知の方が多いと思うんですが、なぜとび職が火消しになるのかといいますと、当時は一応水がビュツと出るくらいのはあったんですが、今のようには大きなホースでバツツと消火するなんてことはできないわけです。そうすると、基本的な消火方法は家の屋根に上がって、その家を壊すってことです。

つまり、家を壊して空き地を作れば火がワツツと広がって類焼していったところで、空き地に出会ったときに、そこで火が消えるんですね。ですから、家を壊して空き地をつく

ってやらないとだめなんです。江戸も後期になりますと、いろんなところに広小路ができます。上野の広小路もそうですが、火事を止めるための空き地です。それで、そういう空き地がない場合は家を壊さなきゃならないんです。そこでとび職の人たちが家を壊すんですね。

実はとびの頭あたまっていうのは大事な役割を負っていて、どの家を壊すか決断しなきゃならないんです。ですから、とびの頭はそのコミニティの中で信頼される人でなければなりません。火事とはにかく緊急事態ですから、相談なんかしてられないわけです。ですから「こういうときにあなたに一任します」という人でないと、とびの頭にはなれません。その人の判断で「ここを壊そう」ということになるんです。

たとえば、組で分かれていますので、その組が集まって、あるいは何組かが協力する場合もあります、屋根の上に乗って、自分

が何の組であるかを示し、じつとそこで立てている幟を目印に家を壊していくんですね。この壊す係りがとびの人たちです。このとびの人たちはいつも命をかけています。いつ死ぬかわかりません。ですから、それは他の人たちから見るとかつこいいと同時に「この人たちを支えてあげなきゃならない」という気持ちをもみなに持たせるんですね。

でも、血の気も盛んで喧嘩っ早いわけです。め組の喧嘩はこの辺りの江戸時代の雰囲気

田中優子（たなか・ゆうこ）



法政大学社会学部教授。日本近世文化、アジア比較文化、近世文学、江戸時代文学専攻。江戸時代の美術、生活文化、海外貿易、経済に精通し、東アジアと江戸の交流にも造詣が深い。主な著書に「江戸の想像力」筑摩書房、「江戸の音」河出書房新社、「近世アジア漂流」「江戸百夢」朝日新聞出版、「江戸の恋」集英社新書などがある。

彷彿とさせて、すごく面白いと思います。特に芝神明のあたりは歌舞伎の小屋や、見世物小屋があつたり、それから、お遊びで弓を射る場所を揚弓場というんですが、そういうものがあつたり、講談や落語をやっていたりしていたんですね。必ず神社とかお寺というのはその周辺に歓楽街ができるわけですが、このあたりも実はそうだったんです。

相撲もやっていて、その相撲を見に来た藤松というとびの人が木戸銭を払わないで入ろうとしたんですね。そのころは、大体とびの人はお金を払わないでいろいろと食べたりするのが平気だったんですね。なぜかというところ「とびだからいいや」というような雰囲気があるからなんです。それで喧嘩になっちゃうんです。入らせてもらえないので腹を立てて、相撲取りとの間で喧嘩になっちゃうんですね。

それをまた他のとびの人たちが助けます。さらに、もっとたくさんのとびの人たちを集

めようと、浜松町の火の見やぐらに上がって、鐘を打って集めちゃうんですね。だから大騒ぎになって、大変な大喧嘩になってしまふ。結局、何人もの相撲取りやとびの職人たちがこの事件で江戸ところばらいになりました。そういう事件が実際にこの芝神明であり、これが歌舞伎になったわけです。こうしたことからも、この増上寺周辺は江戸庶民たちにとって何かわくわくするような空気があったんだなと思います。

もう一つ私が増上寺で思い出すことがあるんですが、「江島・生島事件」ってお聞きになったことがあるでしょうか？ これは大奥の権力者だった江島が三十一歳のときに、たくさんの腰元たちを引き連れて増上寺にお参りに行くことになった時の話です。

大奥の偉い方たちがお参りするときには、お金や反物などの物をたくさん持って行ってお寺に納めるんです。

それを用意したんですが、お参りする前に

一つの事件が起きました。増上寺さんに対して「お参りのあと、歌舞伎を見に行きたいんだけど手配して頂戴」と言ったんです。増上寺さんはあきれまして、断りました。権力のある大奥に屈しなかったんですから、偉かったですよね。

それで、仕方がないから江島さんは呉服屋さんなどの業者に手を回して、芝居見物の手配を全部自分で済ませました。

それで「増上寺さんにお参りする」という表向きの目的通り、増上寺にお参りをしました。そしてその帰りに何十人もつれて歌舞伎劇場に乗り込んだんです。ここに生島といわれる当時の美しい役者がいたんですが、その役者を呼びつけて、お酌をさせてお酒を飲んで、歌舞伎を見ながらドンチャン騒ぎをしたんですよ。その騒ぎがあまりにもうるさくて、せりふも聞こえなかったそうです。

でも、それだけでは飽き足らなくて、芝居茶屋にまで押しかけて大酒を飲んだんで

す。問題はその費用をどうしたかなんですが、もともと増上寺さんに差し上げる中からピンはねしちゃったんです。それで歌舞伎に行っちゃって、大酒飲んでいろんな人に配っちゃった。

これが発覚して、大変な事件になった。ご存知かもしれませんが、もちろん島流しになったわけです。

こういうようにいろんな江戸庶民のエピソードが増上寺さんにあります。当時の増上寺さんはとてもにぎやかなところで、一六〇〇年代の中ごろには三千人くらいのお坊さんがいて、念仏の声がいつも聞こえたといえますし、敷地としては現在の七倍ぐらいの敷地があったと言われています。

さて、参詣ツアーについては先ほど富士講の話をしました。一番盛んなツアーは伊勢講でした。いわゆるお伊勢参りです。これは、上方の人はもちろんですが、江戸の人たちもたくさんお伊勢参りをしています。

一番多いお伊勢参りは一八三〇年で、一年間に五百万人という数字なんです。当時の人口が三千万人ぐらいですから、五百万人という、六人に一人の割合でお伊勢参りに行ったことになる。本当かな？ とちよつと首を傾げたいですが、でもそういう記録が残っているんです。

それからもう一つ、こんな数字も残っています。一七〇五年のことですが、季節がいい四月から五月にお伊勢参りすることが多いんですが、五十日間に百六十二万人が動いたという記録です。ものすごい数の旅人がいたことがわかりますよね。こういう人たちが参詣ツアーをしていたんです。全部が伊勢講のお伊勢参りツアーではないにしても、すごい数のお参りがあったんですね。

ところで、お金はどうするかといえますと、村でツアーを送る場合には、伊勢講のためにお金を積み立てる代わりに、「お伊勢田」という伊勢講に行くための田んぼを作っておい

て、この田んぼの収益を伊勢講に使うんですね。でも、村人全員が行っちゃうと困りますので、その中で代表が行くわけです。

代表しか行けませんから、必ず帰りにみやげを買って帰らないといけない。「みや」というのは、お宮の宮と書くんですよ。宮の宮と書いて宮宮です。つまり、「自分たちを代表で出してくれたんだから、皆さんにお礼をしなきゃ」ということで「宮宮」をもって帰るんです。そこにお土産（宮宮）文化が出来る上があります。

お伊勢様のお土産文化だけではなくて、先ほど言いましたように、江戸にも他の土地から参詣者が集まります。そうすると、江戸のお土産文化も育ちます。浮世絵や各種のガイドブック、たとえば遊郭のガイドブックや、芝居の評判記などをお土産として買っていくんですね。絵草子屋さんは芝にあつたもんですから、かなり旅人もお土産として買っていたのではないかと思います。

とにかくものすごい人数が旅をしていて、女性も子供もよく旅をしていました。九州のある酒問屋さんの奥さんがお友達と二人で六ヶ月ぐらいの旅をしているんです。もちろん荷物持ちを二人連れていたそうですが、こういう旅もありました。もう非常にたくさん旅人が動いていましたが、これは皆さんご存知のように、参勤交代で道路が非常に整備された結果なんです。そのために交通網が充実したし、江戸の経済も活性化しました。

増上寺はそうした江戸にあつて本当に多くの人を訪れたお寺だったんですね。

さて、増上寺さんにまつわる話をいろいろしてきましたが、私もいろいろお話している間に、増上寺さんに対する愛着がますますわいてきました。まだいくつものエピソードもありますが、時間となりましたのでここで終わらせていただきます。

長い時間ありがとうございました。

(了)

蓮

幻の蓮——青い蓮

三浦功大

青い蓮の花（青蓮）を見たいと思いついて二〇年程探しているが女神は未だやってこない。青い蓮はこの世に存在するのだろうか。今日まで見たとの報告がないのでたぶん存在しないだろう。しかし、中国の西城、東南アジア山奥、南米のどこかにひっそりと、咲いているのではないかと淡い希望を抱いている。

いろんな人に外国で見たことがあるかと尋ねると、まれに、見たし写真もあるという人に出会うが、全て睡蓮であった。蓮と睡蓮はまったく異なった進化を遂げた別の種なのである。絵画などには青い蓮が描かれているのは目にするし、東南アジアの土産品には、青い蓮が描かれたものがあるので淡い期待を抱いている。書物や絵画に青い蓮があるのだから、もしかしたら、「青い蓮」がこの世の何処かで生息しているのではないかと思いついている。見たい花はと問われれば即座に「青い蓮」と答えている。

書籍をひもとけば『年とったばあやのお話かこ』（エリナー・ファージョン作 石井桃子訳 岩波書店）の中の短編に「青いハスの花」がある。インドの王子が森の中の池で青いハスを見つけた様子が書かれているが、これは睡蓮のようだ。また、エルジュのタンタンの冒険シリーズ14に「青い蓮」（川口恵子訳 福音館書店）がある。一九三〇年代の上海が舞台のマンガだが、「青い蓮」はアヘン窟のあやしい店の名前で蓮の花とは関係ない。辞典にはどのように出ているか調べてみた。

『大言海』 富山房（一九八二年）

青蓮 しうれん 青蓮華の略 謡曲、調伏曾我「隆三世名王ハ、志ヤうれんノ皆ニ、悪魔ヲ降伏シテ」。青蓮華 しうれんげ 蓮華

ノ一種、葉ハ、長ク広クシテ、青白ノ色ノ、明瞭ナルモノ、略シテ青蓮。法華経妙音菩薩品「菩薩目、如広大青蓮華様」。

とあり、青い蓮は葉が長く青白だとある。蓮の葉が長いとはどこから引用したのだろうか。

『広辞苑』 四版 岩波書店

青蓮 しうれん しょうれん 青蓮華の略。梁塵秘抄「青蓮の眼は夏池」。青蓮華 ハスの一種 葉が長く広く、鮮やかな青色をしており、仏の眼にたとえる。榮華玉台「青蓮華の御眼は四大海をたたへ」。

『国語大辞典』 二版 小学館

青蓮 しうれん しょうれん 青蓮華の略 玉造小町子壮衰書（一〇世紀）「白棺閉神暮、青蓮開眼期」。今昔物語「身は金山の如く目は青蓮に過ぎたり」

青蓮華 しょうれんげ ハスの一種 青色の蓮華、また、仏・菩薩の目にたとえていう。しょうれん

正法眼蔵「五茎の青蓮華を五百の金銭をもて買取りて」。法華經妙音菩薩品「菩薩目、如廣大青蓮華」

青蓮 しょうれん 青いハス 青色の蓮華、また、仏・菩薩の目にたとえていう。しょうれん

菅家文章「觀史之宮、益口青蓮之夢」

『大漢和辭典』修訂版第八刷 大修館書店 一九八八年

①セイレン 青色のはす。『北夢瑣言』湖州染戸家、池生青蓮花、刺史収問、染工曰、我家三世治靛、常以

蓮子浸缸底、經歲然後種之、又何怪。『柳宗元、禮部賀白龍并青蓮花合歡蓮子黃瓜等表』今月
日内云云、出西内定禮池中青蓮花并神龍寺前合歡蓮子示百僚。

②シヨウレン 梵語 Upala 優鉢羅。青色の蓮華。千手觀音四十手中、其の右手の一手持つもので、其

の手を青蓮華手と名づける。又、其の葉は長くて広く、青色分明で大人の眼目の相があるため、
佛の目に喩へる。『法苑珠林』目譬青蓮柳、眉方翠柳。『維摩經弘明品』目淨修広如青蓮。

〔注〕肇日、天竺有青蓮華、其葉修而広、青白分明、有大人目相、故以為喩也。

とあり、いずれの辞書も青い蓮は仏典からの引用であり、青蓮は菩薩の眼にたとえて使われている。また、
「葉が長い蓮」とだけ書いてその説明がない、品種としての説明もない。

『広辞苑』が引用している『梁塵秘抄』には「青蓮」は仏の眼の形容として三種出ている。



弥陀の御顔は秋の月、青蓮の眼は夏の池 四十の齒ぐきは冬の雪 三十二相春の花 (二八)
眉の間の白毫は 五つの須弥をぞ集めたる 眼の間の青蓮は 四大海をぞ湛へたる (四三)
花の都を振り捨てて くれくれ参るは臍けか かつは権現御覽ぜよ 青蓮の眼をあざやかに (二六〇)

『浄土三部経』の『阿弥陀経』には、

極楽国土 有七宝池 八功德水充滿 其池中底 純以錦紗布地 四辺階道 金銀瑠璃玻瓈合成上有 楼閣亦以金銀瑠璃 碑磔赤朱碼礪而嚴飾之池中蓮華大如車輪 青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光微妙香潔

とあり、極楽浄土の七宝の宝石でちりばめられた蓮池には、車輪ほどもある大きな蓮の花―優鉢羅華 utpala (青蓮)・拘物頭華 kumuda (黄蓮)・波頭摩華 padma (赤(紅)蓮)・芬陀利華 pundarika (白蓮)が咲いていとある。そして、池中には、青黄赤白の光を放っているところある。

極楽の描写とはいえ青色青光の蓮は仏教經典に活写されているのだから、この世にも存在するものと想像したい。本来この世に存在しなかったものか、絶えて無くなったものか解らないが、何処かで生息してほしいのだ。

インド学者の松山俊太郎氏は『FRONT』の「ロータスの環」で、仏教の原点を漢語に訳す時、東アジアに存在しなかったであろう黄蓮、青蓮の出現をこのように記している。

(インド) 最古の文献『リグ・ヴェーダ』の千余の賛歌で、ハス・スイレン語彙が現れるのは、プシュカラ

の数回とブンダリーカの一回だけで、当時はなにを指したかすら明確でない。ところが、後代には、古典語サンスクリットのもので五〇〇語を超えている。土着語を吸収した上に、それぞれ一〇に余る〈水〉〈泥〉〈生じた〉などを合成して、〈水生花〉〈泥生花〉といった複合語を、ハス・スイレンを呼ぶのに用いたからである。何種類の実物を認識していたのか分明でなく、時代・地方・個人で意味を異にすることが多く、種類によって文学的機能が反対になったりするので、詩文の干渉は容易でない。

とはいえ、初期の仏典では、四種の代表的なハス・スイレンが固定していた。

utpala uppala 昼咲く青スイレン

kumuda 夜咲く白スイレン

padma paduma 紅いハス

pundarka 白いハス

これを原典で読み分けられるのに苦労はないが、漢訳では、音写のほかに、安易な意識をおこなったため、大きな誤解を生じた。中世までの中国人は、ハスは赤いものと思っていたし、スイレンは、晋の『南方草木状』が紹介するまで、無視されていた。だから、さきの四語の訳し分けに困って、〈青蓮^{しやうれん}〉〈黄蓮^{おうれん}〉〈赤（紅）蓮〉〈白蓮〉と、色で無理に区別してしまつたのである。この誤訳から、実在しない〈青いハス〉への熱烈な憧れが生じ、〈外側が淡緑色を帯びた白いハス〉を〈青蓮〉として尊崇したことは、涙ぐましいほどである。また、〈黄色い蓮〉も、北米にしか存在しなかったのに、あると思ひ込んだ。

と指摘している。インドにも中国にも、いわゆる東洋には存在しなかった黄蓮と元来この世に存在しなかった青蓮を、ハス・スイレンと認識し黄スイレン、青スイレンを黄蓮と青蓮と訳したため混乱がおきているようだ。

混乱も千数百年たてばひとつの歴史である。それにしても、仏教と蓮は表裏一体の関係にあるのに、仏教学研究や僧侶に蓮に興味を持つ人が少ないのは甚だ残念である。

続けて、松山俊太郎氏はkumudaの誤訳を次のように指摘している。

ハス・スイレンに関して夥しい^{びやうけん}謬見を発表した南方熊楠は、クンダという「白いジャスミン」を指す「軍図」という訳語をクムダと誤認した上で、インドにない「黄スイレン」だと説いているが、クンダもクムダも「まっ白いもの」の代表だった。これらはまだしも、白いハスを見知らぬ昔の中国人はインドにおける「ブンダリーカ（白いハス）」の格別の意義を知るすべもなく、「サッタルマ・ブンダリーカ」という、「正法白蓮華」と翻すべき経題を、「正法蓮華」「妙法蓮華」と、「白蓮華」という特質を示さず訳して済ませてしまった。

この経題が『法華経』の中核の秘密を開く「鍵語」だと気づかぬままに、壮大な教学の体系を樹立する、原因となったのである。この経を創作したインドの法師たちの真の意図は、「正法白蓮華」の第一義が、「正法の体言としての白蓮華（すなわち釈尊）」であり、同経で釈尊と並坐する「多宝如来」が「紅蓮華（すなわち男性化した蓮女神）」であるという秘密を察知しなければ、把握しようがないものであった。この秘儀こそ、エジプトの「スイレンに坐する太陽神ホルス」のモチーフが、メソポタミアにおける「世界の中心の池の生命の樹」や「太陽を表象する大車輪」のモチーフと複合し、インドの神話的諸伝承と合流した末に形成された、画期的な構図を開示するものだったのである。

と記し、大乘經典の一つである『妙法蓮華経』は、正しくは『正法白蓮華経』と訳さなければならなかったと

指摘している。

インド・アジヤンタ石窟遺跡（五・六世紀）で、最も美しいとされる第一窟後廊左部の「蓮華手菩薩」は手に、青蓮華（utpala）を持つているが、青い蓮ではなく青い睡蓮である。また、スリランカの聖山シギリアの石窟遺跡（五世紀末）には、多数の乙女が手に花を持つている図が描かれていて、中に乙女が花籠に散華を盛った絵が描かれているが、ここでも青い蓮ではなく青い睡蓮である。

蓮の品種に青蓮の名前が付いているものに、中国には一丈青蓮、粉青蓮、日本には西円寺青蓮、唐招提寺青蓮などがあり、いずれも開花寸前までの蕾は緑色を帯びているが咲くと白蓮である。

アメリカ産種の黄蓮の日本への導入は、一九六〇年秋アメリカ・コロラド州デンバー在住の小川一郎が、訪米中の皇太子ご夫妻（現天皇・皇后陛下）に、地元の蓮の実を献上されたものを、大賀一郎氏が翌年実生より開花させた花を「王子蓮」と命名した淡黄蓮が最初である。アメリカ種のバージニア蓮（黄蓮）は一九六八年阪本佑二が導入している。

海老原捷治は『遺伝』（一九六九年八月号）の「アメリカハス」で次のように記している。

アメリカから取り寄せた *Nelumb Lutea Pers* を三尺土管に底をつけて栽培した。繁茂はするが花が上がないので、蓮田を作ってみたところ、花卉の墓からわずかに黄色の花をつけた。たぶん日本でははじめての開花だろう大賀先生に種子を五粒分譲したが、不成功であったという。その後、蓮根を持ち帰られたが、他界してしまったので結果を聞く由もない。

とある。年月日が記入されていないので、一九五〇年代なのか六〇年代なのか不明。

中国人も青蓮に興味があると見えて、だいぶ古くから青い蓮の作り方を指南している。『和漢三彩図絵』は明代の『古今医統大全』徐春甫編（一五五六年）から引用している。

碧色の芙蓉にするには、まず一夕、靛^{せき}を水に調え、紙を用いて花蕊^{あい}をその水に蘸したうえ、紙でこれをつんでおくと、次の日、碧色の花を開く。（通用諸方集花木類木之異）

とある。興味のある方は挑戦してみてはいかがだろうか。

また、明代の高濂『遵生八牋』（一五九二）には次のように出ている。

以蓮子磨去頂上些小 浸靛缸中 明年清明取起種之 花開青色有此方 而未試。（後略）

また、『庶物類纂』には、唐代・孫光憲の『北夢瑣言』から引用している。

韓文公愈之甥 有種花之異 聞於小説 杜給自孺休 典湖州有染戸家 池生青蓮花（後略）。

とある。近年バイオテクノロジーのめざましい技術進歩で、ペチュニアから青色素デルフェニジンを取り出せるようであるから、人工的な青い蓮の花が誕生するのも近いかもしれない。

表紙のことば

4月

嵯峨念仏

京都の春の念仏会として有名なもののひとつは壬生寺の大念仏会、もうひとつはこの嵯峨の清凉寺釈迦堂で毎年四月（もと三月）中旬に行われる大念仏会である。どちらも念仏狂言が演じられるのが特徴である。ともに無言劇。古風な面を付けた農村の老人たちによって、高い舞台で狂言が演じられる。仕草だけで声を出さない完全なパントマイムの演技である。1279（弘安2）年、円覚上人の創始と伝えられる。

連載

会いたい人
関 容子

安野光雅
さん
②



安野さんにお母さんの思い出が比較的希薄、と聞いたことがあって、ちょっと意外な気がする。

「宿屋には女手が必要なので、世話する人がいて母が後妻に入ったわけね。父より十三年、下だった。わたしは母が三十五のときの子供なんです。物ごろついたときは先妻の残したいかい（大きい）姉ちゃん、こまい（小さい）姉ちゃんがいって、それからじきに嫁に行つたんだと思う。姉たちから見れば母は継母（継母）になるわけだけど、姉たちのチームワークはしっかりしてて、母のほうが弱い立場だったように思いますよ。宿屋という商売柄、髪結さんが来て母が丸髷に結つてもらっているのをそばでじつと見てたおぼえがある。わたしが学校から帰って、滅多にないんだけど、母が家にいないことがあると、ものすごく寂しいんだね。その場合、どこで泣くか、場所も決まってるの。表通りからまっすぐ入った部屋の隅に座布団が積んであって、その陰で泣くと誰にも見えないの（笑）。勉強なんかち

つとも見てくれない母だったけど、一度父兄会に来てくれたことがあって、来る途中で大福餅を買ってきたんだね。そんなもの学校で、ほら、なんて渡されてもしようがないと思うけどね（笑）。そのくらいかな。印象に強く残ってるのは」

以前に読んだエピソードで、いかにも多感な安野さんの少年時代を彷彿とさせられたことがある。それは、津和野の生家の一軒置いた隣りに大きな醤油屋があつて、その裏に貼り出してあつた一枚の手描きのポスターを、食い入るように眺めて佇む少年の姿……。

「ああ、画用紙に青インク一色で描いてあつた、空想の芝居のポスターね。その絵と文字の配置が何とも言えずいい具合で、いいなあ、と感じ入って見てました。ずっとあとになつて、近所の人に確かめてわかつたんだけど、その醤油屋へは香月泰男のお母さんが、彼を置いて後妻に入っていたんですね。だからときどき中学生くらいの香月さんがお母さんに会いに来てて、そんなポスターを描いて貼り

出して行っただらうね。あれは絶対彼の作品に間違いない、と思ってる」

戦後、シベリア抑留時代の絵ですっかり有名になった画家の香月泰男は、安野さんの十五、年上だから、そのポスターを描いたときは中学生よりも少し上だったかも知れない。

それにしても、実在しない架空の芝居のポスターとは夢があつて素敵だが、そう言えばのちに安野さんだつて遅筆堂と号する井上ひさしさんのまだ書いてない芝居のポスターを何度か描く羽目になっている。

「そうそう（笑）。劇場と役者が抑えてあつてまだ台本が書いてなくても、ポスターやチラシを作つてまず切符を売らなくちゃならない。そうすると香月さんみたいに空想で描くことになるんだね。いつか『長屋の仇討』という題名を聞かされて、長屋に住んでる堀部安兵衛のイメージがパツと浮かんだから、紅白の段々幕を張りめぐらしたりして描き上げたら、それが『イヌの仇討』になっちゃった。

急遽、忠臣蔵の討入りの雪の炭小屋に変えて描き直しましたけど。井上さんの芝居は出来上がつてきさえすれば面白いんだから、まあ仕方がないね」

安野さんのこの大らかさ、屈託の無さからは想像がつかないほど、その青春時代は苦渋に満ちたものだった。

「戦争が激しくなると父の宿屋のお客が少なくなつて、修学旅行にも行かしてもらえないくらいに困つてきた。そのころわたしは九州筑豊の炭鉱で働いたことがあつてね。トロツコで地底世界へ入つて行くと、そこは実に悲惨な状況だった。毎日何人かが落盤事故で死ぬんだからひどいもので、それというのは戦争でいくらかでも石炭のエネルギーが欲しいから、人員の安全対策よりもどんどん掘り進むほうが優先する。掘ったらそこに突っかい棒して行かなきゃならないのに、最初一メートル置きだった丸太がどんどん間遠になつて行く。一本の丸太で地球が支えられるわけがない……つてこれ、暗い地の底の笑い話だね」

そのうち炭鉱の安野さんに召集令状が届く。

「兵隊に行つて落盤からは逃れられて、やれやれと思つたね。香川県の坂出、王越村へ行つただけで、そこで何をしてたかと言え、上陸用舟艇を作つてた。その小舟にたくさん石を二十個ほど積んで、そうして船のお尻を下げないとバランスがとれないのです。それに鉄砲も何もない兵隊をただ乗せるだけ、というんだからあきれるね。これはすぐ負ける、と思つた。鉄砲なんか三十何人かの部隊に二三艇しかなくて、しかも弾の出る穴が横に片寄つてる不良品。そんなもので撃てませんよ。でも弾もないんだから同じだ。こんなにひどい情況だとは兵隊に来るまではわからなかつた。新兵は朝から晩まで叱られっぱなしで、われわれは腹がへつたということしか頭にない。炭鉱はまだそれでも食料があつたからね。軍隊じゃ上官と炊事当番はタラフク食べてたけど、兵隊はわずかししか食べられない。それでバカバカしいことに、そのベニヤ板製の小

舟を、大きな穴掘つて敵機から見えないようにかくすわけだ（笑）。まったく笑いごとみたいでしょう。低空してくる敵機からは機銃掃射があるし。アメリカ軍はやりやすかつたでしょうね。下からは何も飛んでこないんだから……」

やがて終戦となり、安野さんは出征半年で無事帰還することができた。

「少し上の世代になると、戻つてこないのがかなりいましたよ。それでわたしは親父の疎開先へ復員したの。三人の姉たちの子供十人くらいを引き連れて。父は故郷の徳山（山口県）にいましたのでね。帰つてみると、若い男なんかもうすっかりなくなつてましたから、すぐに代用教員の口があつて、そこで山口師範学校へ行つて教職課程をとつて、その後約十年間、場所はあちこちに変るけど、教員生活を送ることになるんです」

安野さんは昭和二十四年に上京、三鷹市、武蔵野市などの小学校で先生をした。玉川学



東京在住の津和野出身者が集まる「つわの会」。
安野さんは後列右から6人目



安野さんの出身地、津和野に平成13年3月に開館した安野光雅美術館。常設展示室のほか、アトリエ(再現)、プラネタリウム(写真右)などがある



園では先生というより編集をやらされるハメになったりしたが、そのころ、これも意外なことにお見合いで結婚する。

「徳山で、昔いた学校の校長に土地の娘と見合いさせられて、その日のうちに東京へ帰ったから顔も何も憶えてなかった。そしたら玉川学園の音楽室の窓辺でピアノを弾いてた美人の先生がいて、たしかあんな顔だったかな……と思っちゃったのがまずかった（笑）。錯覚のまんま結婚しました」

そして、男の子と女の子の子のパパとなるのだが、そのころの安野さんのよきパパぶり、よき先生ぶりがうかがえる話がある。どちらも『眠りの精』というドイツ民謡をブラームスが編曲した歌が関わっているのが面白い。

「いろんな翻訳があるけれども、へお目目あいてる子供さがし 眠りの精が小窓のぞき……と歌って、眠らない子の目に砂を入れて眠らせるんだよ、って長男が三つか四つのころに話したのね。そうしたら『精』なんてものをわかるはずもないのに、それには手がある

のか、足があるのか、っていろいろ訊くんだ。見ると、すっかり怯えてるんだよ（笑）。これはまずいこと言っちゃったと思って、大丈夫、お父さんがちゃんと紙に書いて貼つとくから、と言つてね、眠りの精さま、うちには眠らない子はいません、どうか来ないでください、って書いたの。でもそれじゃまだ長男は信用しないで、お母さんのとこへ持つてつて、読んでもらつて確かめて、それで安心してやつと寝た、ということがありましたね」

そして後日譚。

「ある日、小学校の絵の時間に、眠りの精の話をして、子供の目に砂を入れるところを描いてごらん、って言つたの。するとだいたいの子は小人の妖精が直接子供の眼に砂を入れるところを描くんだけど、一人の女の子は、砂粒を細かくすりつぶす機械の、砂の注ぎ口とかまでを丹念に描いて、窓の隙間から透明のホースを差しこんで、そこから細かい砂がパツと飛ぶ仕掛けとか、実に愉快な発想なんだよね（笑）。この子は将来絵描きになつたら

いいんじゃないか、と思っただけど、でも怖くてそんなこと言えませんよ。だって、絵で生活できるのはほんのひと握りの人たちだからね。で、結局その子は医者になったの。優秀な子でしたからね」

安野さんが画家として独立を決心するのは、昭和三十六年、三十六歳のときだった。

「教員時代に美術の教科書に関する仕事をしていたし、そんなことから『少年倶楽部』の表紙写真のモデルになるような少年を紹介してほしい、と頼まれて、教え子の中から美少年を選んで連れて行った。わが少年時代からの憧れ、講談社を初めて訪れたら、わたしが愛読してた当時の加藤編集長が目の前に出てきたんだよ。もう感激しましたねえ」

そうした縁から安野さんは、アンデルセンの『裸の王様』を手はじめに講談社の仕事をするようになる。その後、挿し絵や装丁の仕事の依頼が順調にくるようになった。

「教員をやめたのは、装丁で毎月二万円は保証されるようになったから。当時の二万円は、今の五万円くらいかな？」

と、安野さんが浮世離れた計算をするので、あのころたしかフランク永井が歌って流行了った唄、一万三千八百円……という歌詞があったのを突然思い出し、あれは新入社員の新任給の額のはずだから、二万円はそんな安い額ではないでしょう、と言ったら、安野画伯がひどく感心してくれた。

(つづく)

世も広く人も多ければ、山の奥、林の中に籠りいて、人にも知られぬ念仏者の、貴く目出度き、さすがに多く有るを、我が聞かず知らぬにてこそあれ。されば、我ほどの念仏者、よも有らじと思ひがこと、僻事なり。この思いは大驕慢にてあれば、すなわち三心も欠くるなり。

【法然上人行状絵図 卷第二十二】

世の中は広いものです。さまざまな人がいます。当然、山奥や林の中に籠って、ひっそりとお念仏に励む奇特な方はたくさんいらつしやるでしょう。しかし、その現実を、自分が知らないだけなのです。ですから、自分ほど念仏に励んでいる者はいないだろうなどと思ひ上げるのは間違いです。そんな「大驕慢」の思いを起せば、至誠心、深心、回向発願心の三心もすぐさま失せてしまうでしょう。

上には上が

「隣の芝生は青い」。が、時によっては「我が家の芝生こそ青い」とする――。

前者は、他人の境遇や所有しているモノが自分のよりもすぐれていると見、羨望せんぼうしてしまうことである。かと思えば、オレこそは誰よりもすぐれていると判じ（実は、勝手に、もしくは無理やり思い込み）、優越感にひたるのである。

なんともいい加減というか、身勝手というか……。この二つの矛盾した道理（？）を、ご都合主義よろしく使い分けることのできる才能を、私たちは誰もが持っている。しかも、無意識に、しれっと、何事もなかったかのようにそれができる。

両者の効能や如何。

まず前者。「ムム、アイツ出来やがるなあ……」が第一段階。次はその人の性格や置かれた状況によっても分かれる。つまり「まあ見てろ、いつか抜かしてやる」とプラス（仮にそうしておく）に向くか、「ヘッ、オレなんかどうせ……とマイナス方向にこもるか、あるいは「他人は他人さ」とサラリ流すか。

「プラス」の方は、目標がなんであるかはさておき、その人の発奮材料となっているということだし、「マイナス」の方は、反対にヤル気を削いってしまうという結果を引き出している。最後の「流し」は、実はねたみ、ひがみをもみ消さんがため、または

それを覚られまいとする詭言きごんだったりする。

続いて後者。「オレほどのヤツは、そうはおるまい」がスタート。これは本来、思いつきという避けるべき心情ではあるが、それを昇華して多少なりとも努力を続けるかもしれない。「勝って（勝ったつもりで）兜の…」である。その上、もし端はたから「オマエはデキル！」などとヘタに誉められようものなら、もつとスゴイ力を発揮するかもしれない。「豚もおだてりゃ…」だ。これらはいずれも「プラス」。しかし、「ウサギと亀」の「ウサギ」になつてしまう可能性の方が、たぶんずっと高い。そうなつては「マイナス」。

こう見てくると、他人の芝生を青く見ることに、自分の芝生こそ青いと見ることに、功罪両方の面があることがわかる。どちらがいいか、にわかには判じ難いのだが、もう少し突っ込んで考えてみよう。

前者の「プラス」は、向上心とも反骨精神ともいえよう。自分よりも相手が上であることをまず認める。そして、それに追いつけ、追い越せの精神で努力するのは、人生、あらゆる面で必要だ。「マイナス」や「流し」の思考と比べれば、いい考え方といえるだろう。

しかしそれが達成できた時点で、突如として後者の「ウサギ」に成り下がってしまったという可能性も秘めている。「ザマアしろ」と思った時が一番怖い。

後者の「プラス」はどうだろう。仮に「思ひ上がり」をプラス活用することはできたとしても、いつも「兜の緒を締め続けている」ことができるか、「木に登ったままでいる」ことができるか、聊か心もとない。人として大事なもの（たとえば信頼といった）を失ってしまうというリスクも背負うし、さらには、自分で自分を貶める結果にもなりかねない。

法然上人の言葉は、大驕慢がもとで阿弥陀仏の大慈悲から漏れ落ちてしまう危惧を示唆している。そこには、だから謙虚さを持って、とのアドバイスがうかがえる。謙虚さは冷静さにつながり、事の本質が見えてきたりもする。

念仏者に限らない。何につけ上には上がある。それを前提に据えてみよう。これは決して卑屈になることを意味するものではない。現実を知らない、いや、認めようとならないところに落とし穴はありそうだ。

その穴に落ちないためには、阿弥陀仏が救いの対象としてくださった自分であることとの自覚、これを忘れないことにあると思えるのだ。

（小村 正孝）

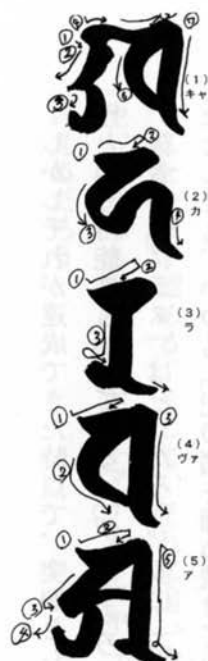
連載

『梵字』

塔婆の梵字の意味するもの(3)

浄土宗の場合

真野龍海



先号までで、梵字の塔婆の書き方の中に、(1)表がキャ・カ・ラ・ヴァ・アで、裏面がヴァンの書き方と、(2)表がキリクで、裏面がヴァンの書き方と二種類あると説明しました。

さて、梵字は、どちらかというとな浄土宗よりも古くからある真言宗等の伝統によるもので、浄土宗もこの伝統を受けながら、それを基準として梵字を書いてきました。

真言宗等の伝統を重んじる教団の教えでは、梵字、悉曇(梵字のこと)などは、師匠から弟子への教授、即ち、師資相伝ということが厳しく言われてきました。ちょうど、五重相伝のように、文字だけではなく、宗教的な意味づけや、修練を重ねて師匠から許可、相伝を受けることが大切とされていました。

最近の当該宗派の出版物でも、何々宗は相伝を受けていないから不当とか、昔の話として、ある地方の他宗のものが相伝なしに(梵字)塔婆を書いたからけしからん、ということとで、引き抜かれたという記事もあります。そういうわけでもありませんが、私も数名の

真言宗の方と共に、一年ばかり、人間国宝の高僧の下に通いました。私の場合、浄土宗の僧侶となる道場で悉曇の教授師を勤めたので、そのように致しました。重要な仏、菩薩、教義の象徴ですから多少の作法はもちろん、意味や内容で過ちのないようにしたいものです。

反対に、師匠から弟子に伝わる中に、間違いや、誤解や、文法抜きの解釈がかりにあっても、その高僧の誠められた言葉が忘れられません。間違いがあっても、間違いと言っただけではありません。ということでした。事実伝わる中に、間違った字のまま伝わっているものがままあります。梵字の伝承の中ではほとんど文法は抜きだからでしょう。袈裟に金糸で刺繍された梵字でも間違いが見かけられることもあります。それをあげつらってはいけないう、宗教的象徴だからという遠慮があつたことでありましょう。かるはずみな知ったかぶりは謹みましょう。

さて、塔婆の話の(1)(2)とも浄土宗の教えと直接に結ばれてはいませんが、仏教

伝統の代表的な書き方となっています。しかし、裏面のヴァンの文字も大日如来であると申しましたが、真言宗等の教えでは大日如来は仏さまや菩薩を含んだものというのですから、大日如来は、西方阿弥陀仏、その他四方の仏菩薩を含むとされますから、浄土宗でもないのではないかと考えられていますか、それとも、なにも考えずに、長らくの伝統によって書かれているのだと思います。

浄土宗としては、どちらかと言えば、(1)(2)ではなく(3)「表は阿弥陀仏のキリク」「裏面は入一法句」か、(4)「表は南無阿弥陀仏」「裏面は入一法句」が、ふさわしく、また、その書き方が多いのです。

先日、浄土宗のある御住職方の集會でお尋ねしましたら、三分の二の方が、(3)で三分の一の方が、(1)でした。ただし、併用の方もあります。どちらにしても、キリクか、南無阿弥陀仏が主流です。私は(2)もしくは(1)です。

(了)

連載

「バリアフリー考」

第6回（最終回）

文／**白木カ** バリアフリーデザイン研究会事務局長
一級建築士／インテリアプランナー

写真／**丸山カ** バリアフリーデザイン研究会会員
歩行者・電車空間デザイナー

引き戸 と 開き戸



場所を広く、有効に使用おうとする場合に多用するのが引き戸だ。障子や襖が、それにあたる。高さも天井まで目一杯とって部屋の共有を計れるから、多目的な用途を求める和室にはうってつけだ。農家に見られる田の字型の間取りも発

想は同じだろう。食べて、飲んで、歌って、寝て、と用途は本当に多様だ。結婚式から葬式まで自宅で済ませたこの国の生活に裏付けられていて興味深い。

反対に開き戸は場所を限定的にさせられる。ブライパシーの確保や防犯上も安心でき、現代人にとって馴染みが深くなってきたドアと言えそう。オシャレな雰囲気をつくってくれ、インテリアとしては西洋風。考えてみると、日本の家に畳の数が一桁になつてしまい、和室が一部屋くらいしか見当たらなくなつた実状を裏付けているようにも見える。今やほとんどの日本人の暮らしが、西洋化してしまつた感さえある。出入り口で気になるのが、わずかな数居の段差だ。もちろん引き戸の場合が圧倒的に多い。これは日本的なすまいほど段差が目立ち段差解消が求められていると言ふことか。だからといって「開き戸」がいいかと言へば、そうとも言えない。畳の間の板の間に変身しても、ドアは段差無し「引き戸」に変身することは多い。和

魂洋才の一つかもしれないが、珍しいことではない。日本人特有の「咀嚼文化」から新しい文化が生まれたようなものだ。狭い敷地に家を建てているところが多い日本では、場所を取る「開き戸」より「引き戸」が庶民感覚としては馴染みやすい。ただ、住みにくさを解消するため「開き戸」をモダンな「引き戸」にするくらいしか思い浮かばないとしたら何とも情けない。

「狭い」戸建ての持ち家を奨励してきた住宅政策に躍らされた庶民に罪はない。西洋風の家づくりに憧れて自分の家を持つてはみたが、高齢化が進みすぎ、気がついたら何とも住みにくい家に様変わりというのが本音だろう。いつも住宅政策は後手に回ることが多い。

高齢社会をひかえて、庶民としては根本的な家づくりのための制度の見直しを必要としている。この庶民感覚と行政側のサーブス意識のズレは何とかならないものかと思う。

(了)

法然上人を
めぐる人々

一の谷序章

◆ 第五回 ◆



石丸晶子

絵・石川忠夫

(十六)

「小松殿の兄君たちのなさりそうなことよ」
教盛が、かんで吐き出すような口調でいった。

「なれど、三草の陣すでに敗れたとなれば、
義経の軍勢はすぐにも南に下って山の手^{やまのて}に押し寄せましようぞ。われらも急ぎ手を打たねばなりませんまい」
経盛がいった。

「いかにも、急がねばならぬ」

と教盛は宗盛に向かって、
「大手にまわした者の中から、誰かを大將軍に任じて、山の手に向かわせねばなりませんまい」

「いかにも、いかにも、門脇殿のいわれる通りでござるな」動悸が鎮まらないなかから、宗盛が答えた。

「屋島に戻ってしまわれたとあれば、あらためて小松殿の方々を山の手にしし向けること

はかなわぬが、さて、いずれの方にお願ひすればよろしいか」

結局、このとき平家は、宗盛の名で一門の君達数人に急ぎ使者を送り、三草山敗戦のあとの山の手鶴越^{やまのて}方面が布陣する大將軍になるよう、懇請した。

だがその懇請をうけた誰一人として引き受けようとしなかったのである。

彼らはそろって、

「山の手は大切なところでございますれば、わたくしごときなど、とてもその柄ではございせん。どうか他の方に」

といつて辞退した。戦闘の最前線に立つことを、みな、恐ろしがったのである。

一門の人々次々に辞退してきたのをみて、宗盛は困じた。

そして結局、このとき福原の海上に浮かぶ船の中に、予備軍の総指揮をまかされていた教盛の次男能登守教経に、使者をたてたのである。

「山陽道を平定してこの福原まで攻め上つてこれたのは、ひとえに能登殿のお働きによることで、今また休む間もなく山の手の大將軍をお引きくださいとは、まことに言い出しかねることではありますが、貴殿、ひきうけてはくださらぬか。この大役を、他の方々へお願いしても、ひきうけ手が誰一人としておりませぬ」

宗盛は使者にそう口上させた。

使者の口上を聞いた教経は齒がみした。そして、

「戦さと申すものは、武者たち一人々々が、我一人が事の勝敗を決するのだ、との覚悟を持ってこそ勝つことができるというもの。それをそのように怖気づき、少しでも足場のよいところに立つて危険なところを避けようとして尻ごみしては、勝ち戦さにも負けまいしやうぞ。何が何でもこの教経、命ある限りは、いかに手ごわい相手でも、受持った戦場で必ず勝つてこちらに入れまする」

と答え。教経は騎馬武者一万余を率いて兄の三位通盛とともに鶴越（つるごえ）のふもとに向つていった。

（十七）

その鶴越にふもとの陣に、通盛はひそかに北の方小宰相を伴つていった。

教盛率いる一万余の軍兵が布陣したのは二月五日の夕刻である。

その二月五日の深夜から翌六日の早曉にかけて、甲冑をぬぎ、狩衣の日常着に着かえた通盛は、ひそかに妻小宰相を陣中にまねき、その片隅に幕を張りめぐらせて臥つていた。

通盛は妻の髪をなでながら、

「それにしても、この通盛が都落ちにさいしてそなたの同行を望んだばかりに、ここまで連れ出してしもうた。ならわぬ旅の空に漂うて、はや二年になる」

「殿が望まれたから西海に赴いたのではありませぬ。わたくしが望んだのでございます」

「優しいことをいう」

「夫婦がともにいのうて。何をいたしましうぞ」

「そなたは強い女^{おんな}じゃ。この二年、「心身を休ますところとてなく、陸を追われ、海に漂い、今また戦陣にあるというのに、そなたは一度たりとも嘆かれたこともなければ、その様子を顔に出されたこともない」

「嘆いたとて甲斐なきことを嘆いて何といたしましうぞ。それよりも、わたくしは殿とこうしてご一緒でありますのが、何よりもうれしいのでございます」

「われらは、そなたが側にいのうては、戦さの恐ろしさに生きていけるものではないわ。こうしてそなたの肌にふれておれば、いつ

ときなりと戦さの恐ろしさを忘れておれる。

「私はどこにも参りませぬ。いつも殿のお側におります」

「すまぬ。われらと夫婦にならなければ、そなたは今も上西門院さまに仕えて、かかる苦

勞はせずすんだものを」

小宰相は藤原刑部卿憲方の娘で、通盛の北の方になる以前。後白河法皇の姉上西門院に仕える、美人中の美人といわれた女房であった。

「何を仰せられます」

と小宰相は、

「今、上西門院さまのことをお口にされましたので思い出しました。御信心深くあられた女院さまは、度々、巷のうわさに高德の聖と名高い法然上人を御所に招かれ、法話を聴聞されました」

「法然房のことは耳にしたことがあるが」

「尊いみ姿でございました。今、ありありと思ひ出します」

「いかなる法話を聴聞されてか」

「あみだ仏の御本願について話され、まごころから罪を悔い、一心にみだ仏に縋れば、悉皆浄土往生とのみ教えでございました」

「……」



「殿」

とそのとき小宰相は側に臥っている夫にからだを向けて、

「お心強くお持ちくださいませ。明日は戦さとなりましょう。今、殿がお縫りできるのはただ一つ、法然上人のみ教えにありましたあみだ仏への念称のみでございます」

「……………」

「そしてまた」

小宰相はしばしいい淀んでいたが、やがて意を決したように、

「殿のお心を騒がせることを懸念し、今まで黙しておりましたが、わたくしは身ごもりました。旅路の中で懐妊した子でございます」
「おお、今何と申した。そなた、子を身ごもったとな」

通盛は半身を起こして妻の顔を見つめた。

「はい、旅路の中で身ごもりました」

突然、からだから突き上げてくるような歓喜が通盛をおそった。

「この通盛、三十になるまで子というものを持つことができずにいたものを、今、われらも子の父となったとは」

そういうと通盛の目からうれし涙がこぼれ落ちた。

とそのときである。荒々しい足音が夫婦の枕辺にきこえたと思うと、さっと荒々しく幕が左右に開けられ、通盛の弟教盛の怒りの声があたりにひびいた。

「兄上、ここを何と申しておられる。ここは、今にも源氏の先陣が攻め込んでくるかもしれぬ戦陣でござるぞ。一門のものが戦陣に女を呼び入れ、夫婦の睦言を交わしているなど言語道断。武者たちの士氣にもかかりますぞ。早々に北の方をお歸しあれ」

（十八）

丁度その同じ頃、一の谷の平家の陣では経盛の嫡子経正と未子の敦盛らが話し合っていた。

一の谷本陣の帳幕がはりめぐらされ、急ごしらえにしつらえられた屋形には、旧暦二月の春の月光がふりそそいでいる。兄弟は屋形の端近くに出て、月光を浴びて話し合っていた。

敦盛十七歳の手には笛の名器小枝が握られている。

「敦盛、明日は大きな合戦になろうぞ。その笛も今夜が見おさめかもしれぬ」

経正はいった。

「今夜がさいごかもしれぬ。心ゆくまで笛を吹いて、兄に聞かせてくれ」

「西海に赴きますとき、兄上はかねて御室から下賜されておられた琵琶の名器青山を、戦場の塵になすようなことあれば申しわけがたぬと仰せられて、お返しに参上されたそうでございますが」

敦盛は少しの間まをおいて、

「わたくしはこの笛を戦陣にまで持ってきてしまいました」

「その笛は父祖相伝のものよ。われらが祖父忠盛殿が笛の上手であったによって、亡き鳥羽院が下賜されたのじゃ。朝廷にお返しに参上することもあるまいぞ」

「……」

敦盛は無言のうちに笛を錦の小袋から取り出すと、吹きはじめた。

名曲松風であった。

「おお、その調べは松風ではないか」

経正はそういうと、

「この一の谷周辺には松の木が多い。この屋形のまわりにも松林が広がっておる。そなたの笛をきいていると、松林を渡る風の音を耳にする思いじゃ」

「兄上」

一曲吹きおわると、敦盛は経正に呼びかけた。

「戦陣の中にあっても、雅の心を忘れたくありません」

「おお、もとよりのことよ。戦陣の中におる

からこそ、われらは雅びの心を忘れてはならぬのじゃ」

「兄上の仰せられること、わたくしにもようわかります」

その敦盛のことばをうけて経正は、

「雅びの心を忘れては、われらは戦場でただ人を殺し合うだけの者になるではないか」

「武勇には猛くとも、雅びを知らぬ東夷オウゴウと同じ者にはなりとうございませぬ」

「よういうた敦盛、その心で明日の合戦にも臨もうぞ」

「勝っても負けても、去年までは宮廷に列した平家一門の誇りを失いとうはございませぬ。

一門の誇りをもって勝ち、一門のほこりを持って死にまする」



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●名

〔特選〕年賀状あて名書く手の喜寿のしわ

堀

管子

この頃ワープロなど、手抜きとしか言いようのない年賀状が多い。せめて名前くらいはと思うのだが、これは少なくとも名前を手書きしている。手の甲のしわには、七十年歩んできた人生が刻まれている。

〔佳作〕名を呼べば走ってくるよ枯れ野の犬

中村 洋子

名前書き終えて春待つ一年生

谷 しげ子

名のよこに一言添えてお年玉

今井 恵子

●波

〔特選〕入り江深く波押し上げて初荷着く

石原

新

入り江の小港である。今初荷を積んだ船が着岸した。船の起こす波は入り江深く及んでゆき、渚を騒がせる。「波押し上げて」が、

初荷のめでたさを一層強めている。正月にふさわしい表現となった。

〔佳作〕

上げ潮の波ゆるゆると冬日和

中島 一子

露天風呂波音遠き春の宵

細田 初枝

寒鰯の跳ねたる波紋広がりぬ

加藤 政男

●自由題

〔特選〕

風日和壁に競える飾り風

石原 新

風揚げによい日和である。原っぱでは幾つもの風が揚がつているのだろうが、これは飾りだから、壁面でその華やかさを競っているのだ。外と内との対比で成り立っているのだが、面白く仕上がつている。

〔佳作〕

啓蟄や上州いまだ風荒く

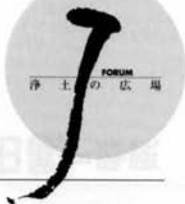
中島富士子

冬すみれ朽ち葉のもとに色深く

宮野きよ子

初雪やそこらへちよつとスケッチに

野村多加子



参加作品 編集部選

名

表札に子の名加へし晩の春
子の病名告げられしより凍ての日々
初場所やしこ名の幟競い立つ
卒業式祖父の名残の袴着て
称名の声冴え返る寺の朝
名物の赤福を買ふ初詣
初硯命名の文字太きかな

中島富士子
片桐てい女
中島 一子
金谷 友江
大場 清
細田 初枝
浜口 佳春

波

波際に遊べる犬や春夕べ
縄とびの大波小波寄せて春
寒波や庭に道路の及びけり
尊きは冬波越ゆる人の智恵
寒梅の咲けど一湾波高し
初漁の歓喜聞こえる波止場かな
風花や波打ち際に光り散る
荒ぶれてそして寂しき波の華

中島富士子
片桐てい女
金谷 友江
堀 菅子
西井 正
佐藤 まり
大場 清
山本美代子

浄土誌上句会のお知らせ

題

(※季語はありません)

気遊自由題

締切・二〇〇四年四月二十日

発表・『浄土』二〇〇四年六月号

選者・増田河郎子(「南風」主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

自由題

大根抜く尻の向こうに時化の海
木枯一番午砲に湧いて貨車溜
灯を消せば満月冴える松の内
按摩機を背中に這わす五日かな
縫い初めの刺子の赤き花ふきん
綾取りの子の指伸びる日向ぼこ

池田 伊吹
片桐てい女
中島 一子
増田 信子
北田 弘子
中村よみ子

さっちゃんね



9 かい目

かまち♡ふしろう



球音に家の夕食片づかず

岱潤

待ちに待ったプロ野球が開幕した。筆者も無類の野球ファンで、最近ではゲーム開始から終了まで放映してくれるテレビもあり、夜六時から十時頃までは何も手に付かない。誠に困ったことでもある。

さて今年のプロ野球、日本は四番バッターをずらり並べた巨人、そしてアメリカは、スタープレイヤー揃いのヤンキースと、金満野球がここまで来たかといった感だ。試合としては一番おもしろくないオールスターゲームを、毎日見せられているような気がする。まさにオナーの品格が疑われる。

昔本で読んだ話だが、ある会社が各部から一番のエリート社員だけを集めて部

署を作り、製品の開発を始めた。しかししばらくすると、その部署にも落ちこぼれが出来た。そしてその落ちこぼれた社員は、かつてエリートだっただけに立ち直ることも、居座ることも出来ず会社を辞めていったという。そんな話だ。同じような能力ある者だけを集めることよりも、それぞれの個性が生きる職場、バランス感覚のある職場が、人は最もいい仕事をするように思われて仕方がない。

今年のプロ野球、そうした意味でおもしろくもあり、またおもしろくもない。ある人の言葉だが、記憶に残るプレーは、勝敗よりもフライングプレーであり、劇的な逆転打だったりする。そうしたおもしろい野球を期待したい。(長)

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村真道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

浄土

七十巻四月号 頒価六百元

年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年 三月二十日

発行 平成十六年 四月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(二五七八)九四六七

FAX 〇三(二五七八)〇三六七

振替 〇二八・八・八二二八七

編集顧問

大室了皓

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

村田洋一

月刊

浄土 もうすぐ 800 号

特別

企画 [表紙ライブラリー]



昭和44年10月号



昭和44年11月号



昭和44年12月号



昭和45年1月号



昭和45年2月号



昭和45年3月号



昭和45年4月号



昭和45年5月号



昭和45年6月号



昭和45年7月号



昭和45年8月号



昭和45年9月号



昭和45年10月号



昭和45年11月号



昭和45年12月号



昭和46年1月号

法然上人鑑仰会

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円

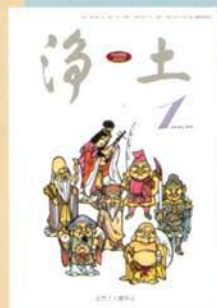


『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円

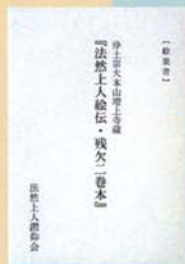


『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



「法然上人絵伝絵巻書」
(8枚セット) 800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036